

白彊前進

NO. 6 平成29年7月21日(金)
附属新潟中学校 学校だより

※ 白彊前進…自ら努め励み、前に進むこと(校歌3番の文言から)

平成29年度1学期終業式校長講話

校長 柳沼 宏寿

いよいよ今日で一学期が終了します。4月の入学式にスタートを切って以来、長い一学期間だったかと思えます。日々の授業をはじめとして、部活動や生徒会活動、そして、ときわ体育祭や完歩大会など、さすが附中生ならではの取り組みをみせてくれました。やるべきことが山積する中でよく頑張ってきましたね。お疲れ様でした。夏期休業中はゆっくりとリフレッシュして、そしてじっくりと充電して二学期へ備えてください。特に3年生にとっては部活動などへの関わりが変わる時期で、進路実現へ向けての大きなターニングポイントでもあります。気持ちをうまく切り替えて次に繋げていただきたいと思います。

今年、本校は創立70周年を迎えますが、創立当時、今から70年前の1947年(昭和22年)は、戦後まだ2年が経過したばかりの時代でした。この年は、教育基本法と学校教育法の公布、6・3・3学制発足、日本国憲法施行、最高裁判所発足等々、まさに戦後の日本が自立して歩み始めた時期でした。その年に誕生した本校は、これまで70年間に渡り大学の附属学校としての役割をしっかりと果たしてきました。その役割とは、新しい時代を担う人材を育成するために先進的な教育を推進し、その成果を全国へ普及させることでした。それは日本を発展させるために大変重要な役割であったわけですが、先進的とはいえ、生身の生徒を扱う学校教育ですから失敗することは許されません。そのように重要な使命と責務を持って歩んできた学校であることは多くの方々にとってほしいと思えます。現在、ユネスコが「Education2030」で提唱しているように、グローバル化に対応すべく文化の多様性や貧困・紛争といった困難な課題に立ち向かうことが求められています。まさに、附属新潟中学校のみなさんのように、対話的で深い学びを高い次元で展開している人材が期待される所以です。

ところで、新しい時代を担うみなさんに考えてほしいことをお話するために、今日は私の家族のことに少し触れたいと思えます。まず、私の祖母についてです。祖母は私が18歳の時に他界しました。急に心臓発作を起こしてのことだったのですが、小さい頃から両親が仕事に出ていて普段からおばあちゃんっ子だったものですから、「ご臨終です」という医師の一言にとってもショックを受けて思わず手を握りしめました。まだ手の温もりが残っていました。でも、それが次第に冷たくなっていくのがわかって、人間にとっての「死」というものの意味を体で感じたような気がします。そして、その「現実」を体験したことによって、逆に「生きている」ことの意味をより深く理解できるようになったと思っています。

また、昨年末のことですが、父親が他界しました。場所が離れていたこともあり、連絡をもらって駆けつけたのですが、死に目に会うことはできませんでした。対面したのはすでに亡くなっていた父。私もこの年なので、「死」の意味は十分理解できるつもりでしたが、今回なかなか受け入れることができませんでした。何か自分の中で割り切れない思いを引きずっていた感じがします。振り返れば、亡くなるまでの一年ぐらいは若干認知症も入ってきておかしな行動をとったりしていましたから、口うるさく説教めいたことを言ったりもしてきました。でも、いざ亡くなってしまった父親を前にすると、



「想像力で未来からの声を聴こう」

そのようなことよりも、幼い頃からのいろんな思い出が込み上げてきて、とりわけ自分が可愛がってもらっていた場面や父の笑顔が思い浮かんできました。そして、伝えたかったこと、伝えなくてはいけなかったことがたくさん溢れだしてきました。その中でも一言でいいから伝えたいと思ったのは、やはり「ありがとう」という言葉です。なぜ、あの時もっと早く駆けつけてその一言を伝えてあげられなかったのだろう。そしてまた、最後に父と会った3週間前のあの日に、なぜそれを言わなかったのだろう。いや、なぜもっと早く、普段から言っておかなかったのだろう。今でも悔やまれます。できることならば、あの時の自分にこの思いを伝えたいです。

話は変わって、もう十数年前になりますが戦争をテーマにした『君を忘れない』(渡邊孝好監督)という映画がありました。神風特攻隊の隊員が突撃命令を受けてから出撃するまでの心理的な葛藤を描いたものです。そのラストシーンで、唐沢寿明演じる指揮官が零戦に取り込みいざ飛び立とうとするとき、木村拓哉演じる隊員に「俺は間違っているか」と聞く場面がありました。すると隊員は「はい間違ってます。俺たちみんな」と言いながら、大空へ飛び立っていったのです。これは半世紀以上前の出来事を基に、私たちへ向けられたメッセージです。当時の隊員達にそのような認識があったかどうかはわかりません。でも、私はこのメッセージをあの時代の隊員達に伝えてあげたいと思いました。当時の体制や戦況からすれば、仮にこのメッセージが彼らに届いたところで、誰もどうすることもできなかったでしょう。それでも、誰かが気づいてくれたかもしれない。そして何かが変わったかもしれない。「いのち」の尊さは普遍だから、そう思うのです。

未来からのメッセージを受け取ることができたなら、自分ももっと適切な判断ができたかもしれないと思うことがあります。また、未来の自分なら、今の強い自分も弱い自分も全てを受け止めて叱咤激励してくれるかもしれないと……。不可能なことのようですが、ここで、想像力を駆使してトライしてみましょう。さあ、今、自分自身の生き様を、一呼吸置いて、冷静に見つめてみてください。そして、十年後あるいは二十年後の自分を想像してみてください。社会に出て活躍している真っ最中ですね。こつこつとまじめに努力を積み重ねているかもしれません。大成功を収めているかもしれません。何かに失敗をして落ち込んでいるかもしれません。苦しい日々を乗り越えようと奔走しているかもしれません。いずれにしても、大人になった自分が、もし、中学生の今のあなたをみたら、どのような言葉をくれるでしょうか。

未来からのメッセージ。しっかりと掴み取って、ぜひこれからの自分の生き方に活かして行ってください。



「もっと熱くなれ!と未来の自分に言われました」…3年1組 大石ちとせさんの「未来からのメッセージ」です。



応援団員がリードし、全校生徒一丸で放った入魂の附中エール! みんなの気持ちはひとつになりました。7月22日(土)、23日(日)の両日、各競技、各会場で、附中魂を存分に発揮してほしいです!



音楽部は7月28日(金)13時半より、新潟テルサにてNHK全国学校音楽コンクール新潟県大会に出場します。課題曲「願い事の持ち腐れ」の素晴らしい演奏を披露してくれました。頑張ってください!